

# 生徒指導上の問題としての援助交際再考

歌川光一・鈴木 翔・岡邑 衛・佐々木基裕

## 1. 問題の所在

### 1-1. 援助交際という問題

「援助交際」は、1996・97年頃にメディア上で一大ブームを巻き起こした。その余波は論壇にまで及び、教育学者や心理学者が論壇誌上で様々な言説を展開するに至った<sup>1</sup>。宮台真司は、援助交際を行う女子高生を対象としたフィールドワークに基づき、女子高生間に流行する援助交際の現実に対応できない学校側を批判する言説を積み重ねていった(1997→2000, 1994→2006a)。大きな物語が消失しポスト・モダン状況へ陥っているという社会状況判断のもとに、近代学校教育という建前が消滅し、家父長制的な貞操観念による指導が無効化していることがその原因として指摘された。そのため宮台の記述において教師の役割に焦点が当てられることは多くなく、当てられたとしても、学校という制度または団塊世代を中心とした親世代らと同様に、消費社会化の進行した「都市的現実」に対応できない無力な存在として教師が位置づけられている(宮台・藤井1998)。

教育学者や心理学者が援助交際に否定的な視線を向けていたのとは異なり、宮台は援助交際に新しい時代へ対応した女子高生の戦略を見出していた(「終わりなき日常」を「まったり」生きる、という表現を宮台は用いている)。ここで強調されたのは、1980年代以前の「非行」「逸脱」との差異である。伊藤(1996)は戦後における青少年の問題行動の変遷を整理し、1970~80年代は発生場所が学校内であり、受験戦争等への反抗という性質を有していたのに対し、1990年代における問題行動は学校の内外で発生し、人間関係などの「心」の問題としての性質を有するようになっていったと指摘している。従来の思春期女子による「不純異性交遊」が学校からの逸脱・非行として理解される現象であったのに対して、1990年代における援助交際は青少年の心の中で起こっている何らかの問題に起因するものとして扱われていた<sup>2</sup>。宮台の分析においても、どのような少女が援助交際という逸脱傾向を示すのかではなく、一見逸脱しそうにもない少女がなぜ援助交際を行うのかという心理的動機への関心が強くなっている。

援助交際において友人が果たす役割についても、「島宇宙」内で行われるコミュニケーションによる自己像の確認を行うための存在とされ、心理的動機と関連した説明がなされた。近代学校教育を通じて伝達される家父長制的な道徳観念はもはや失効したという認識のもとでは、何がよいことで悪いことかという道徳的判断が曖昧になる。そのため援助交際を行う女子高生は自分にとって都合の良いラインを設定し、それ以上の行為を行う友人を「変な子」として扱うことで、自分を安心させていると分析されている。「何もかもが「程度問題」になっているなかで、自分勝手につくりあげた仕切りのこちら側に自分がいるという事実をもって「自分はメチャクチャではない」という自己イメージを保とうとしている」のである(宮台1994→2006a: 88)。後に宮台(1998)はこうした自己像の確認とい

う議論を進展させ、「性の自己決定」を行うことができる存在として〈援交少女〉を位置づけていった。それは反転して、「性＝人格」に基づく指導を行う学校や教師に対する批判とも重なっていた<sup>3</sup>。

メディア上での援助交際ブームは1990年代後半に終りを迎えた。しかしこれは援助交際がなくなったのではなく、むしろ「日常化」したことを意味するのだと圓田（2001）は見ている。宮台と同様に援助交際に関するフィールドワークを行った圓田は、宮台による社会学的な分析を継承しつつも、「AC（アダルト・チルドレン）系」類型を提唱し、援助交際は学校・職場・仲間集団などの社会集団における承認の欠如を埋め合わせる機能を果たしていることを指摘した。宮台も後に類型として「メンヘル系」を提唱し、援交少女の病理的側面に言及するようになるが（宮台2006a）、動機に基づく類型論から援助交際という現象にアプローチしている点で、圓田と宮台は共通している。

仲野由佳理はこうした動機に基づく類型論への批判を行っている。これまでの援助交際論は、援助交際を非日常とみなし、心理的な影響を受け続けた結果の「傷ついた存在」として援助交際を行う少女を意味づけてきた。それに対して仲野（2007）は、実際には友人関係などのさまざまな「日常的」相互行為と結びつけて援助交際が語られることを指摘し、病理（援助交際）と正常（それ以外）という区分が自明なものではないことを指摘した。その上で仲野（2010）が強調するのが、動機の動態性である。援助交際当事者ははじめから援助交際に至る明確な動機を説明できるのではなく、その継続過程において動機が次第に自覚されていくという変容過程があることを、類型論は不可視化してしまう。第1段階（最初の逸脱）から第2段階（逸脱行為の継続）への移行メカニズムにおいて、マンガ・雑誌・インターネット等のメディアから援助交際に関する学習が行われ、それによって援助交際体験者として適切なふるまいかたが獲得されるという。

友人関係はその移行過程において重要な役割を持つものとして位置づけられている。学校で友人が援助交際を「気持ち悪いよね」と語るのを聞き、それによって援助交際に対する“行為の準拠棒”を認識した事例を基に、援助交際体験者の逸脱キャリアの特徴を、「“対面的な経験者集団との相互作用の機会”をもたずに常習化に至る」ことにあると指摘している（仲野2010: 20）。そうした対面的な経験者集団の代替的機能をメディアが果たしていると分析されている。

宮台が調査を行った1990年代と仲野が調査を行った2000年代では、援助交際の場面がテレクラから出会い系サイトへと移行していたという背景もあるため、この議論の変遷をそのまま援助交際論の変遷として整理するわけにはいかない。しかし、援助交際にかかわる研究・言説において、心理的動機から人間関係ネットワークへと説明の要因が移行してきていることが少なくとも指摘できる<sup>4</sup>。

（佐々木）

## 1-2. 本稿の目的

2000年代から2010年代にかけ「援助交際」をめぐる議論は一巡するとともに、『生徒指導提要』でも言及されるに至った。初発年齢の早い少年非行が、のちの不良行為の常習化により、次第に援助交際などの「本格的非行に発展」という記述である（文部科学省2010: 166-167）。ここでの「援助交際」は、窃盗、粗暴な非行、薬物に依存する非行等の「本格的非行」の一例として挙げられており、その内容については詳述されていない。また、初発年齢の早い少年非行の原因についても家庭での愛情の欲求不満という一面的な記述にとどまっている（同上）。

本稿では、「援助交際」というプライベートかつ学校外で起こる性非行を再考することで、学校に

おける性非行に関わる生徒指導上の視角について示唆を得ることとしたい。

具体的には、まず教育雑誌である『月刊生徒指導』上の「援助交際」をめぐる議論を確認する。次に、友人・恋人等の人間関係も視野に入れながら、1990年代の「援助交際」の実態をめぐるデータの二次分析を行う。

(歌川)

## 2. 生徒指導上の問題としての援助交際

1990年代から2000年代にかけて社会問題化した生徒の性非行、とくに「援助交際」について、学校現場における生徒指導の文脈ではどのように論じられてきたのだろうか。

ここでは、以下の2点の理由から、学術論文ではなく主に教育雑誌『月刊生徒指導』の記述に着目する。第一に『月刊生徒指導』は生徒に直接関わる教員や、教員の指導的立場にある指導主事などを主な読者としており、また、文章を寄稿するのも専門家のみならず教育現場で生徒の実態をよく知る教員やフリーライター、文部科学省職員などであり、多様な視点から教育現場の実態を映し出していると考えられるからである。第二に、昨今生き残りの厳しい出版業界にあって、創刊(1971年4月)以来刊行を継続していることから、その質の高さは信頼に足るといえることである。資料は筆者が国立国会図書館で入手できる2000年前後の『月刊生徒指導』から、「援助交際」に関する記事を抜粋し、分析を実施した。

『月刊生徒指導』では、この時期、度々児童生徒の「性」について特集で取り上げ、様々な立場の論者が援助交際を含めた児童生徒の性非行および性教育について論じている。事例報告や児童生徒の語り、性非行に出会った時の教師の対処法についてなど、記事の形態も様々であるが、その記事の論点は、①人間関係の希薄化を埋めるもの、心の問題としての援助交際、②情報化の影響のひとつとしての援助交際、③大人に価値観の変革を迫るものとしての援助交際、④経済的な理由による援助交際、⑤マスコミによる情報操作の結果としての援助交際、の5点に集約できる。

この5点について、どのように援助交際が論じられてきたのかを具体的な記述を示しながら述べる。

### ①人間関係の希薄化を埋めるもの、心の問題としての援助交際

ここでの人間関係とは、具体的には友人関係や家族関係のことである。安心できる居場所や友人・家族関係を築けない「女子は、自分の性を提供することによって居場所や安らぐ場所を得る。そのために毎回毎回、求められれば応じる」という内容のものである(三枝2005)。ここで注意しなければならないのは、援助交際は女子だけの問題ではないということである。フリーライターの今(2005)は大人の男性を相手にする「ウリセン少年」取材し、『セックスなしには関係の成立・維持ができない』と思いがちの世代に対しては、『セックス以前』における関係の薄さについて語っておく必要があるように思う」と指摘し、女子だけの問題として語られがちな中、割合としては低いかもしれないが、男子による援助交際についても同様の問題が背景にあることを指摘している。

また、これら援助交際の問題は、親子間では取り扱いづらく、学校の教師が扱う生徒指導上の問題として取り上げざるを得ないところにも、親子間の関係性の難しさが現れている。援助交際をしているらしい生徒に対して教師の取るべき対応として、江熊(2006)は「感情論ではなく、できるだけ論理的に説得」し、「事実が不確実な段階での決めつけは避ける」ことがポイントであると述べている。ここで挙げられている事例では、急に高価な服を着始めた娘に対し、「両親ともそのことを聞いただ

す勇気がなく、結局クラス担任に相談の電話が来た」ところから始まっている。フリーライターの奥野（2003）は援助交際をする家出中の女子生徒が、毎日親に10秒程度の短い電話をし、娘が親を安心させている様子を描いている。10秒という短い通話時間からもわかるように、このとき、親は娘の状況について深くは立ち入らないのである。援助交際や家出の問題に深くは立ち入らない親子関係について、吉野（2008）は「家庭の教育力」を訴えつつも、家庭教育の不十分さを嘆くだけでは問題は解決せず、学校教育が家庭と連携するなどの工夫をしなければならない、としている。また、吉野（2008）は「家庭こそ最も良き道德教育の場」であるという考えに同調している点にも注目したい。性の逸脱行動を「児童生徒の心の問題」として捉える立場である（文部科学省初等中等教育局児童生徒課2003）。このような立場に立つとき、援助交際を含む性の逸脱行動は心の問題であり、ひいては生き方の問題として記述されるのである。

### ②情報化の影響のひとつとしての援助交際

次に、インターネット等の情報化と携帯電話等の普及の影響のひとつとして、援助交際を論じるものである。援助交際の要因のひとつが「出会い系サイト」であるということについては、たとえば文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2003）など、いくつかの記事に記述がみられる。また、2003年8月号の『月刊生徒指導』では「出会い系サイトと生徒指導」が特集で組まれるなど、情報化と生徒指導との関係は無視できないほど大きなものであると言える。

これらの記事では、携帯電話等を用いてインターネットを利用する児童生徒が増加すると同時に、「出会い系サイト」による犯罪が増加していることや、「出会い系サイト」等のインターネット異性紹介事業を規制する法律が整備されてはいるが、大事なことは、インターネットを使う際の児童生徒のモラルであるとされ、それを高めることの必要性が訴えられている（たとえば鈴木2003、若林2003、奥野2003など）。

### ③大人に価値観の変革を迫るものとしての援助交際

続いて、援助交際を考える際に、大人の価値観を問う記事がみられた。援助交際は児童生徒側からのみ説明できるものではなく、児童生徒を「買う」大人の側の価値観が問われる問題である、とするものである。とくに女子高校生が援助交際の対象となることが多い、ということは大人や社会のジェンダー観に問題があるとする主張である。

たとえば、尾木（2003）は援助交際にまつわる中学生による犯罪（援助交際による妊娠を利用して中学3年生女子が男性を恐喝した犯罪など）を紹介し、「ここまで少女たちを、男性と社会蔑視に追い込んでいる社会全体の構造や文化を問題にしなくていいのだろうか」と問題提起をしている。また、東京の大東学園高等学校において実施された「性と生」の授業実践を通して、教師は以下のように、自身の変革が迫られた経験について語っている。

男性中心の社会の文化を自分も生きてきましたから、この授業をやるには自分を変えないとやってこれなかったということです。自分の中にある差別意識、あるいは歪んだみかたですね。性といういままでの男中心に作られてきた文化というのがありますので、それを吹っ切っていくと生徒の前で授業ができないという苦しみです。ですから、全教師がこの授業をやったとき、この学校は大きく変わるんじゃない

かと思います。(五竜 2006)

援助交際を考える際、児童生徒の側からのみ捉えるのではなく、大人の側、社会の側からそれを捉え、児童生徒と共に考えていく生徒指導の在り方がここでは提起されているのである。

#### ④経済的な理由による援助交際

援助交際等、性の逸脱行為で補導・保護された少女が答えたその動機について、奥野(2003)は内閣府による『青少年白書』から、「遊ぶ金が欲しくて」が平成元年は12.6%(3位)だったのが、平成13年には37.1%(1位)に増加していることを指摘し、青少年の思考や価値観が変化している点に注目している。

最近、子どもの貧困が注目されているが、援助交際が社会問題化した2000年前後においては、『月刊生徒指導』からは、貧困という問題ではなく、「遊ぶ金」が必要ということが当時の援助交際の大きな理由のひとつとして考えられていたようである。平成元年からの10年余りで「遊ぶ金」が必要になった少女が増加したことは何を意味するのであろうか。

ここで指摘できるのは①の人間関係の希薄化との関係である。奥野(2003)は「援助交際とセットになっているのが家出」だと指摘するが、当時、「プチ家出」(短期間の家出)という言葉がメディアで登場し、家出がひとつのファッションのように捉えられていた。①で示した奥野(2003)による事例中に、親と電話で話す家出中の女子高校生が出てくるが、この女子高校生は生活費を稼ぐために援助交際を行っていたのである。生活費を稼ぐと言っても、親と連絡を取り合っているような遊び感覚の「プチ家出」であるので、これもまた「遊ぶ金」欲しさによる援助交際と言えるだろう。この裏にあるのは、そのような子どもを家に引き留めておくことができない、また、深く入り込むことをしない親子関係ということになるだろう。

また、援助交際をすることによって得られたお金でブランド物を購入し、身につけるといって、まさに「遊ぶ金」を求めた援助交際も行われていたと考えられる。しかし、このような援助交際について、高校教諭の十二は「自分たちに群がる大人の男たちを『サイフ』と呼び、遊ぶカネやブランド品欲しさに援助交際に走ってしまった生徒も確かにいると思われまます。同じブランド品を持っていないと仲間の中でカッコがつかないというような希薄な友達関係の中で生きているという生徒もいます」(十二2000)と述べ、仲間外れにならないように援助交際をおこなう生徒の存在を指摘している。

#### ⑤マスコミによる情報操作の結果としての援助交際

最後に、「援助交際」という言葉を生み出し、世に広めたマスコミの情報操作の結果としての援助交際についての記述もあった。十二(2000)は「ここ7~8年前ごろからマスコミはこぞって、ミニスカート・ルーズソックス・茶髪=女子高生=援助交際という図式をつくりあげ、最近の女の子は困ったものだと嘆くふりをしながら、『女子高生はブランドである』というイメージを煽り続けてきました。大人たちはミニスカートの制服を着た女子高生を見ると、『援助交際』という言葉思い浮かべるようになっていきます」と指摘している。このマスコミに乗せられた女子高生は、学校がない日でも制服を身にまとい、ミニスカート・ルーズソックス・茶髪で街を練り歩き、また同様にマスコミに乗せられた大人が彼女たちに声をかけ援助交際をする、というのである。もちろん、この背後に見え

隠れするのは③で指摘した、歪んだ価値観ということになるだろう。

以上の5つの論点を示したが、たとえば①と④、③と⑤がそれぞれ関係していたように、これら5つは複雑に絡み合っていると考えられる。『月刊生徒指導』では、生徒がおかれた社会の変化や生徒を取り巻く人間関係の変化、援助交際によって明らかになった大人や社会の問題点やマスコミによる影響等を視野に入れ、この問題について論じられていたとすることができるだろう。学校現場では「援助交際」をめぐる、以上のような言説が生み出されていたと考えることができる。(岡邑)

### 3. 1990年代後半に誰がどのような契機を経て援助交際をしていたのか

#### 3-1. 1990年代後半におけるキャラクターと援助交際

援助交際が問題視されていた1990年代後半に、誰がどのような契機を経て援助交際をしていたのかを把握するため、本章では当時の高校生を対象にした質問紙調査データを分析していく。

2. で確認したように、『月刊生徒指導』は援助交際を取り巻く大人や社会も踏まえた議論を展開する一方で、女子高生の動機に対しては、「人間関係の希薄化を埋めるもの、心の問題」「経済的な理由」としていた。しかし1. で確認したように、先行研究が指摘する援助交際の要因が心理的動機から人間関係ネットワークへと移行してきている状況を受け、どのようなキャラクターがどのような契機によって援助交際に至ったのかという点から90年代末の実態について再考を試みたい。

本稿で着目するキャラクターは、外面的特徴を持たせて周囲への印象を特徴づけようとする当時の「ギャル」志向<sup>5</sup>と、(自己認識として)内面的特徴を持ち、先行研究や『月刊生徒指導』でも援助交際の動機や類型として挙げられていた「メンタルヘルス危機」の女子高生である。(歌川)

#### 3-2. 分析に用いるデータの概要と変数の設定

分析に用いるのは、ベネッセコーポレーションが1997年6～7月に東京都および埼玉県の公立高校12校の普通科に通う高校生を対象に実施した調査データである(「モノグラフ高校生 援助交際(ベネッセコーポレーション)」。対象校は、入学難易度を参照し、いわゆる「上位校、中位校、下位校」からそれぞれ4校ずつ選定されている。調査項目は、援助交際の経験や意識を中心としたものであり、その他にも学校生活や生活満足度を問う項目で構成されており、最終的な有効回答数は1726名である。本章では、そのうち女子が回答した868名を対象として分析を行う。なお調査の概要は、深谷・三枝・小原(1998)に記載されている。本データの特徴は、当時の高校生の援助交際経験はもちろんのこと、他の生活満足度や、当時援助交際経験の有無と関連があると指摘されていた、ギャル志向やメンタルヘルスに関する質問項目が豊富に設定されていることである。このデータの特徴により、本稿の関心に照らした分析を行うことが可能であると考えられる。

次に、分析に用いる変数について説明する。

本章では、一貫して援助交際経験の有無を従属変数として設定し、主にギャル志向とメンタルヘルス危機を独立変数としたロジスティック回帰分析を行っていく。また動的に援助交際に結びつく要因を検証するため、先のギャル志向とメンタルヘルス危機がどのような契機を経て実際の援助交際経験へと結びつくかを別モデルで分析していく。具体的に契機として想定したのは、街で援助交際の誘いを受けたことがあるという経験と友だちから援助交際の誘いを受けたことがある経験の2つである。

表1 分析に用いる変数の設定

援助交際経験ダミー	援助交際をしたことがある =1, ない =0
街で男性から援助交際の誘いを受けたダミー	援助交際をしようと街で男性から声をかけられたことがある =1, ない =0
友だちから援助交際の誘いを受けたダミー	援助交際を友だちから勧められたことがある =1, ない =0
学年	1年生 =1, 2年生 =2, 3年生 =3
毎月のおこづかい金額 (千円単位)	毎月のおこづかいの金額 (円) ÷ 1000
アルバイトダミー	アルバイトをしている =1, アルバイトをしていない =0
彼女いるダミー	現在特定の相手と付き合っている =1, 付き合っていない =0
授業に満足ダミー	学校の授業に満足している =1, 満足していない =0
学校の先生に満足ダミー	学校の先生に満足している =1, 満足していない =0
友だちに満足ダミー	学校の友達に満足している =1, 満足していない =0
ギャル志向スコア	当時のギャル志向を問う設問 (5件法) 4問をカテゴリカル主成分分析で統合し, 標準化
メンタルヘルス危機スコア	メンタルヘルスの状況を問う設問 (5件法) 4問をカテゴリカル主成分分析で統合し, 標準化

表2 分析に用いる変数の記述統計量

	有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
援助交際経験ダミー	864	0.000	1.000	0.044	0.205
街で男性から援助交際の誘いを受けたダミー	862	0.000	1.000	0.252	0.434
友だちから援助交際の誘いを受けたダミー	861	0.000	1.000	0.082	0.275
学年	866	1.000	3.000	2.397	0.600
毎月のおこづかい金額 (千円単位)	862	0.000	32.500	6.665	5.645
アルバイトダミー	863	0.000	1.000	0.384	0.487
彼女いるダミー	862	0.000	1.000	0.233	0.423
授業に満足ダミー	861	0.000	1.000	0.523	0.500
学校の先生に満足ダミー	864	0.000	1.000	0.578	0.494
友だちに満足ダミー	860	0.000	1.000	0.933	0.251
ギャル志向スコア	856	-3.177	1.294	0.000	1.000
メンタルヘルス危機スコア	863	-2.200	2.180	0.000	1.000

ギャル志向スコアは、「茶髪やパーマをかける」「学生服を超ミニスカートにする」「学生服にルーズソックスをはく」「細眉にする」という4つの事項をしたいかどうかを問う質問項目をカテゴリカル主成分分析で統合し設定した。累積寄与率は61.383%である。一方、メンタルヘルス危機スコアは、「感情のコントロールが苦手」「ときどきめっちゃくちゃに行動したくなる」「ときどきむやみに寂しくなる」「誰も自分をわかってくれない」という4つの事項に対し、どの程度自分が思うかどうかを問う質問項目をカテゴリカル主成分分析で統合し設定した。累積寄与率は50.737%である。

そのほか、援助交際の経験へと影響を与えていると想定された学年、1カ月あたりのおこづかい金額、アルバイト経験、授業満足感、教員への満足感、友人関係満足感を統制変数として設定し、分析を行った。用いた変数の設定を表1、記述統計量を表2にまとめた。

### 3-3. 1990年代後半に誰がどのような契機を経て援助交際をしていたのか

援助交際経験の有無の規定要因を分析したものが表3である。はじめに表3のモデル1を確認すると、ギャル志向スコアとメンタルヘルス危機スコアがともに正に有意な影響を与えていることが確認できる。よって、当時マスメディアで盛んに指摘されていたように「(コ)ギャル」志向の高校生やメンタルヘルスが危機的状況にあった高校生は、確かに援助交際を経験しやすい傾向にあったことが

表3 援助交際経験の規定要因（ロジスティック回帰分析）

	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
学年	0.240	1.272	0.017	1.017	0.447	1.563	0.143	1.154
毎月のおこづかい金額 (千円単位)	0.057	1.058 *	0.060	1.061 *	0.060	1.062 *	0.062	1.064 *
アルバイトダミー	0.894	2.446 *	0.740	2.096 †	0.679	1.972	0.566	1.761
彼氏いるダミー	1.108	3.029 **	0.875	2.398 *	1.033	2.811 **	0.939	2.558 *
授業に満足ダミー	-0.779	0.459 †	-0.719	0.487	-0.854	0.426	-0.821	0.440
学校の先生に満足ダミー	0.013	1.013	0.000	1.000	-0.066	0.936	-0.038	0.962
友だちに満足ダミー	0.928	2.529	1.280	3.597	0.842	2.321	1.183	3.263
ギャル志向スコア	0.781	2.183 **	0.304	1.355	0.589	1.803 †	0.218	1.243
メンタルヘルス危機スコア	0.343	1.409 †	0.372	1.451 †	0.280	1.324	0.334	1.397
街で男性から援助交際の 誘いを受けたダミー			2.482	11.971 ***			2.263	9.617 ***
友だちから援助交際の 誘いを受けたダミー					1.752	5.766 ***	1.276	3.581 ***
(定数)	-6.032	0.002 ***	-6.864	0.001 ***	-6.540	0.001 ***	-7.099	0.001 ***
Nagelkerke 決定係数	0.225		0.340		0.286		0.372	
尤度比のカイ2乗検定	p=0.000		p=0.000		p=0.000		p=0.000	
有効度数	831		829		829		829	

(\*\*\*:  $p < 0.001$ , \*\*:  $p < 0.01$ , \*:  $p < 0.05$ , †:  $p < 0.1$ )

確認できる。

しかし、援助交際を経験する契機として設定した「街で男性から援助交際の誘いを受けたダミー」を分析モデルに投入したモデル2を見ると、ギャル志向スコアの効果が減少していることが読み取れる ( $p=n.s.$ )。よって、ギャル志向の高校生は、街で男性から援助交際の誘いを受けたという経験を媒介して、援助交際を行っていたことが想定される。

また、もうひとつの契機として設定した「友だちから援助交際の誘いを受けたダミー」を分析モデルに投入したモデル3を見ると、モデル1では正に有意な影響を与えていたメンタルヘルス危機スコアの効果が減少していることが読み取れる ( $p=n.s.$ )。

これらの分析結果を総括すると、ギャル志向やメンタルヘルスの状況が直接的に援助交際経験へと影響を与えていたわけではなく、当時はそれらの状況が間接的に特定の人物から援助交際の誘いを受けやすい要因として機能していたのではないかという仮説が導出できるだろう。

なお、統制変数として分析に投入した「彼氏いるダミー」は、すべてのモデルで援助交際経験へ正に有意な影響を与えており、当時は恋人がいる高校生のほうが援助交際しやすい傾向にあったことがわかる<sup>6</sup>。そして「アルバイトダミー」は、モデル1とモデル2において、正に有意な影響を与えているが、分析モデルに「友だちから援助交際の誘いを受けたダミー」を投入したモデル3、モデル4では効果が減少していることが読み取れる ( $p=n.s.$ )。これは、アルバイトを経験したことによって、単純に交友関係が拡大して、援助交際の誘いを受ける確率が高まったとも考えられるし、あるいは、学校でできた友人には援助交際を誘ったりできないような雰囲気があるが、アルバイトで知り合った友人であれば、援助交際を誘っても良いと思えるような雰囲気があったという解釈も可能だろう。

(鈴木)



#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、援助交際にかかわる研究において、心理的動機から人間関係ネットワークへと説明の要因が移行してきている状況を受け、生徒指導上の援助交際への視角を把握した上で、「モノグラフ高校生 援助交際（ベネッセコーポレーション）」の二次分析を行った。

ギャル志向やメンタルヘルス危機の状況が間接的に特定の人物から援助交際の誘いを受けやすい要因として機能していたという仮説については、福富（1998）が指摘する、援助交際の経験者は「友人に対する同調、自己開示が多い」（同上：16）や、「友人から経験談を聞くことが多い」（同上：17）とする友人環境にかかわる知見とも合致する。さらに本稿からは外見上の特徴が周囲からもつかみやすかったギャル志向のみならず、自己認識としてメンタルヘルス危機を抱えている女子高生も誘いを受けやすかったことが明らかになっている。ただし自己認識としてのメンタルヘルス危機が当人の外見や行動に影響していたかについては今後も検討が必要である。

また、アルバイトを通じて知り合う友人の存在が援助交際経験に影響していることも明らかになった。山本（2005）は、アルバイトをする高校生は、進学希望と部活動等、性別の要因を統制しても非行を行う確率が高いことを明らかにしており、〈アルバイト→非行〉という因果関係を想定する場合、「学校とは異なる大人、先輩」が「有害環境」となっていると推測している（同上：145-146）。本稿においても結果として援助交際をした女子高生は、当人の状態や動機というよりもアルバイトそのものが契機となっていたことから、仲野（2010）が指摘するように、「アルバイトで友人に誘われて援助交際をした」→「後で動機が思い浮かんだ」という動機の動態が既に見られていた可能性も考えられる。これを生徒指導上の問題として言い換えれば、援助交際の未然防止には、その危険性の周知を含む性教育や個々の生徒の状態やキャラクターの把握以前に、（既になされていたと思われる）アルバイト禁止や学校外の交流・交際の注意の呼びかけそれ自体が有効である可能性が高かったと言えるだろう。

2000年代以降、性や恋愛の「プライベート化」によって、恋愛経験者と未経験者、性交経験者と未経験者の友人関係を通じた情報共有の機会は減っているとする指摘がある（土田2018）。また、2010年代以降、「JKビジネス」のように「女子高生」であることの商品性がより強く意識される社会になっている一方で、「子どもの貧困」問題に代表されるように高校生が働かざるを得ないような状況についても社会的関心が高まっている（仁藤2014）。

本稿は生徒指導上の問題としての援助交際の再考を企図したものであるが、教育学の立場から性非行問題を実質的に食い止めようとするのであれば、心理主義的な視点にとどまらず、友達・恋人関係等にかかわる生徒文化、若者文化研究との接続を意識した分析の積み重ねが肝要になると考えられる。

（歌川）

#### 【謝 辞】

二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「モノグラフ高校生 援助交際（ベネッセコーポレーション）」の個票データの提供を受けた。記して御礼を申し上げる。この一次分析は深谷・三枝・小原（1998）にまとめられている。

また、本研究は JSPS 科研費 JP16H05923 の助成を受けたものである。

## 註

- 1 河合（1997）や、佐藤（1998）などがその代表例として挙げられる。
- 2 村松ほか（1999）による研究では、1990年代の思春期女子の性行動の変化と年長男性の性行動の変化とは同期していることが指摘されている。世代の異なる男女を結ぶ新しいコミュニケーションのチャンネルが出来上がった点が、1980年代以前と1990年代との差異として強調されている。
- 3 また自己決定ができない「性的弱者」として、援助交際を行う「モテない」男性が位置づけられている。後の「非モテ論壇」や本田（2005）によって提唱された「恋愛資本主義」に対しても、「本当はロマンチックなのに、実利的なふりをしてる」（宮台 2006b）という動機による説明が行われている。
- 4 上間（2015）は沖縄の風俗業界で働く若者の調査を行い、仕事ネットワークは仕事・生活場面でのリスク軽減機能を果たさない一方で、中学校の同輩集団がリスクに際して女性の状況を共有し、支えるものとして機能していることを指摘している。
- 5 佐藤（佐久間）（2002）は、当時の「ギャル系」は、メディアが作り上げる消費文化の新しいリーダー（主体）のイメージを支える価値観（自由であること、自己主張できること、个性的であること、注目を集めること）に、より強くアイデンティファイする少女たちとしている（同上：54）。
- 6 福富（1998）の知見とも合致する。

## 【参考・引用文献】

- 江熊隆徳（2006）「援助交際をしているらしい生徒に」『月刊生徒指導』11月号（増刊）
- 深谷和子・三枝恵子・小原孝久（1998）『モノグラフ・高校生'98 vol.52 援助交際』ベネッセ教育研究所。
- 福富護研究代表（1998）『『援助交際』に対する女子高校生の意識と背景要因 報告書』女性のためのアジア平和国民基金。
- 五竜健児（2006）「先生が変わった、生徒も変わった 総合科目「性と生」の授業—高校生の性体験を否定しない。しかし、援助交際は絶対認めない—」『月刊生徒指導』8月号
- 本田透（2005）『電波男』三オブックス。
- 伊藤茂樹（1996）『『心の問題』としてのいじめ問題』『教育社会学研究』59, pp.21-37.
- 十二雅子（2000）「援助交際、『誰にも迷惑かけてない』に切り込む」『月刊生徒指導』12月号
- 河合隼雄（1997）「日本人の心のゆくえ 第9回『援助交際』というムーブメント」『世界』3月号
- 今一生（2005）『『居場所』獲得の手段としての性』『月刊生徒指導』8月号
- 圓田浩二（2001）『誰が誰に何を売するのか？—援助交際にみる性・愛・コミュニケーション』関西学院大学出版会。
- 宮台真司（1998）「自己決定原論—自由と尊厳」『性の自己決定』原論—援助交際・売買春・子どもの性』紀伊國屋書店。
- （1997→2000）『まぼろしの郊外—成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日文庫。
- （1994→2006a）『制服少女たちの選択— After 10 Years』朝日文庫。
- （2006b）『援交少女3世代に男のこたちはガクブルなのだ』の巻, MIYADAI.com Blog, (2018年5月15日取得, <http://www.miyadai.com/index.php?itemid=360>).
- 宮台真司・藤井誠二（1998）『学校の日常を生きぬけ—死なず殺さず殺されず』教育史料出版会。
- 文部科学省（2010）『生徒指導提要』教育図書。
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2003）「生徒指導 MONTHLY 情報5 性の逸脱行動・被害の防止」『月刊生徒指導』8月号
- 村松泰子・佐藤（佐久間）りか・苫米地伸・平野亜矢・岡井崇之（1999）「大人向け雑誌における『女子高生』の性的商品化と思春期女子の性行動の変化に関する研究」『厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書』

- 平成10年度 第2/6』, pp.243-267.
- 仲野由佳理 (2007)「援助交際—『援助交際』体験者のナラティブ」本田由紀編『若者の労働と生活世界—彼らはどんな現実を生活しているか』大月書店.
- (2010)「『援助交際』体験者の逸脱キャリア」『教育社会学研究』87, pp.5-24.
- 仁藤夢乃 (2014)『女子高生の裏社会—「関係性の貧困」に生きる少女たち—』光文社.
- 尾木直樹 (2003)「生徒指導 up-to-date 相次ぐ援助交際犯罪」『月刊生徒指導』3月号
- 奥野真人 (2003)「電子メディアと問題行動—『出会い系サイト』による援助交際・薬物乱用の実態」『月刊生徒指導』8月号
- 三枝恵子 (2005)「垣根が無くなった? 子どもたちの性意識と性行動」『月刊生徒指導』8月号
- 佐藤学 (1998)「『援助交際』に走るKさんへの手紙」『論座』4月号
- 佐藤 (佐久間) りか (2002)「『ギャル系』が意味するもの: <女子高生>をめぐるメディア環境と思春期女子のセルフイメージについて」『国立女性教育会館研究紀要』6, pp.45-57.
- 鈴木達也 (2003)「インターネット異性紹介事業に対する法の整備—『インターネット異性紹介事業を利用して児童を誘引する行為の規制等に関する法律』の制定について」『月刊生徒指導』8月号
- 土田陽子 (2018)「性や恋愛に消極的な若者—その内実と友人関係の影響」林雄亮編著『青少年の性行動はどう変わってきたか—全国調査にみる40年間—』ミネルヴァ書房, pp.152-172.
- 上間陽子 (2015)「風俗業界で働く女性のネットワークと学校体験」『教育社会学研究』96, pp.87-108.
- 若林彰 (2003)「異性紹介サイト等ハイテク犯罪に対する東京都の取り組み」『月刊生徒指導』8月号
- 山本功 (2005)「高校生のアルバイトは非行を抑止するか」『犯罪社会学研究』30, pp.138-150.
- 吉野尚也 (2008)「生徒指導実践講座最終回 不純異性交遊」『月刊生徒指導』3月号

(うたがわ こういち 初等教育学科)

(すずき しょう 秋田大学大学院理工学研究科)

(おかむら えい 甲子園大学栄養学部栄養学科)

(ささき もとひろ 名古屋女子大学文学部児童教育学科)